

浄土

monthly
JÔDO

2013
January

1



平家物語断章

鐘の声

巻第一

祇園精舎の鐘の声、諸行無常のひびきあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわす。奢れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者も遂にはほろびぬ。偏に風の前の塵に同じ。

古代インドのコーサラ国にスダッタという富豪がいたという。彼は釈尊のために精舎（寺院）を建立し寄進した。その精舎には鐘樓が具わっていた。

仏の教えの真理を説いた釈尊さえ不死ではなかった。釈尊の入滅の地はクシナガラ郊外。一对の沙羅の樹の間に身を横たえた釈尊が息をひきとるとき、沙羅の双樹は悲しみのあまり時ならぬ白い花を咲かせたと伝わる。

これは盲目の琵琶法師が語り継いだ物語である。古代インドの風景を知らなくとも、しめやかな撥の音に、聴衆はその鐘の音を耳奥によみがえらせたのである。

北海道・室蘭

満岡寺

寺に歴史あり

人々に信仰あり

日本の

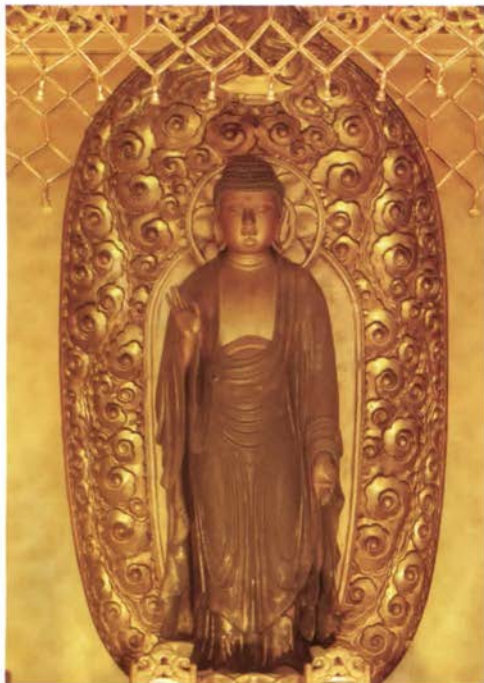
心の故郷を紀行する

寺院紀行



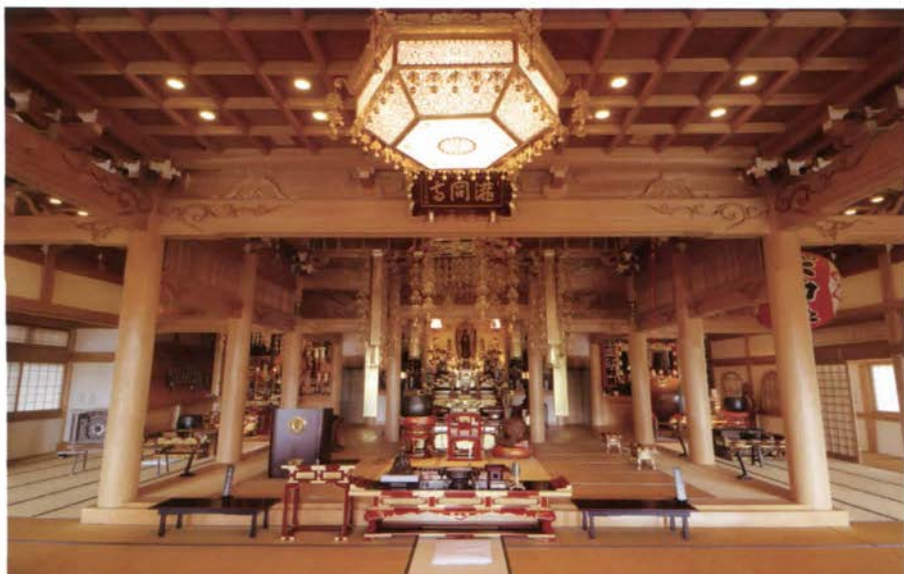
室蘭最古の浄土宗寺院、満岡寺の本堂は平成15年に建立された11間四方の大伽藍だ。満岡寺第七世の飯島英徳住職とその長男の飯島佳紀副住職。





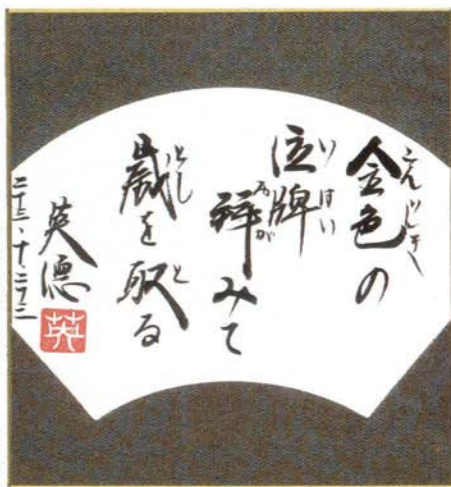
満岡寺の本尊は、開山である満岡上人が芝増上寺から遷座された阿弥陀如来立像だ。

満岡上人は74歳の時に本尊とともに増上寺から室蘭に赴いたが、再び増上寺山内の常照院に戻り80歳で遷化されている。開山満岡上人像。

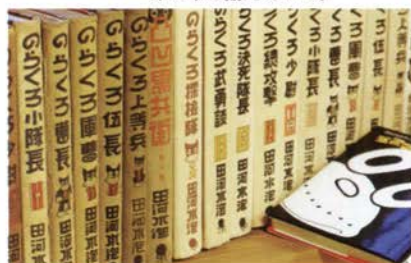


満岡寺内陣。右手奥の脇陣には成田山の不動明王の御身分が安置され、その前には護摩壇がある。地元の不動信仰を満岡寺が受け入れたものだ。

今回の取材に合わせて満岡寺飯島住職に詠んでもらった俳句。



40年近くかけて集めたという「のらくろ」の全集。飯島住職は「浄土」で出会った吉田絃二郎の本も揃えている。



美味しい水に恵れた沢町に移転してきた満岡寺。暖かい室蘭は、雪が少なく外墓地もある。



飯島住職が今も大切に持っている母から最初にもらった漫画。「婦人倶楽部」昭和8年9月号の別冊付録だった「凸凹黒兵衛」。



無縁の方々の供養のために作られた参道脇の御堂。

明治中期に不動信仰が盛んになり、成田山の不動明王の御身分をいただき、満岡寺に祀られることになった不動明王像。



この観世音菩薩像は日蓮六老僧の一人で、北海道に伝説を残す日持上人（鎌倉時代）の作。日本製鋼の守護神だったものが、戦後縁あって満岡寺に祀られることとなった。

昨年11月に第3回全国工場夜景サミットが室蘭で開催されたが、鉄の街室蘭の夜景は素晴らしい。奥に架かるのが白鳥橋。



浄土

2013/1月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 室蘭 満岡寺	写真=タカオカ邦彦	1
法然上人をめぐる人々を終えて	石丸晶子	6
	聞き手=長谷川岱潤	
寺院紀行 室蘭 満岡寺	真山 剛	16
会いたい人 串田和美さん②	関 容子	24
響流十方	小村正孝	34
連載小説 渡辺海旭	前田和男	38
Jフォーラム		47
誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	51
編集後記		52
表紙裏・平家物語断章		
背表紙裏・泰雲の美味探訪		



表紙題字=中村康隆元浄土門主
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎

本誌連載

法然上人を
めぐる人々
を終えて

石丸晶子先生に聞く

前編

編集 この「法然上人をめぐる人々」は、一九九七年の一月号から連載が開始されまして、昨年二〇一二年の十月号まで足掛け十五年、途中で少し休憩の時期がございましたが、なんと八章七十五回という連載をお書きいただきました。本当にお疲れさまでございました。**石丸** 編集部の皆さんにはいろいろとお煩わせしてしまいました。長谷川編集長に一度メールでお送りしますと、すぐメールでご返信くださり、その短いお言葉に励まされて、今日まで何とか書き続けることができました。

編集 ありがとうございます。

石丸 一度も穴を開けませんでしたね。

編集 そうですね。一度もないですね。浄土学や法然教学の専門家でなく、また、ご信仰も違う先生が、ここまで法然上人のことを長きにわたってお書きいただいたことが、私たちにとりましては本当にありがたく、感謝申し上げます。

きょうも先生の法然上人に惹かれた理由などをお伺いできたらと思います。

最初に、法然上人についてお書きいただくのに周辺の人々から法然上人を取り上げていくという書き方、また、学者である先生が、評伝ではなくて、小説という形でお書きになり、志したお気持ち等をお聞きたいと思います。

石丸 最初は、長谷川先生から法然上人について何か書くようにというご要望だったと思います。

しかし、私は「法然上人のことはとても書けません」とお断りいたしました。それを覚えております。

「聖者は聖者にしか書けない」ということを私自身常日頃から感じておりまして、法然上

人は、余りに偉大すぎて、ご人格も深遠で、とても私のような人間には書けないということとを常々思っております。

ですから、法然上人の周辺の方であつたら書かせていただけるでしょうか、ということをお尋ねしたことを覚えています。

そうしましたら、「それでもいいですよ」とおっしゃってくださいました。初めはこんなに長くなるとは予想もつかなく、何となく、大胡四郎隆義のことから書き始めました。

評伝やエッセーではなく、こういう小説の形をなぜとったのかといいますと、かねがね私は小説を書きたいとずっと思っておりましたが、なかなかその機会がありませんでした。評伝、エッセー、評論を書く機会はたびたびあるのですが、小説のご依頼をいただくことがなく、発表する場もなかったのです。

ただ最初るとき、私は式子内親王伝で「紫式部文学賞」を受賞しました。そのとき、選考委員の大庭みな子先生という有名な小説家がいらして、もう亡くなりましたが、先生が私に「小説を書いてみなさい」とお薦めくださいました。それで力も得まして、小説を書きたいな、書きたいなと思っているところに、月刊『浄土』の方からお話をいただきました。で、本当にご迷惑だったかもしれませんが、『浄土』の誌面を借りて小説に挑んでみようというのが最初でございます。

編集 大胡四郎の親子の話から始まりまして、最初は、『四十八巻伝』に出てくる高砂の漁師ですとか、室ノ津の遊女のお話等のところ、第1章がまとまっておりませんが、第2章は本当に先生の真骨頂と申しますか、式子内親王さんのお話です。

先生の中では式子内親王さんと法然上人の関係というのは、非常に興味のあるところで

ございますね。

石丸 そうですね。ただ、式子内親王と法然上人には、大変心惹かれておりますが、最初、それを式子内親王から入らずに、大胡四郎隆義のことを考えておりました。ご存じように法然上人にはお手紙が三十通現存しています。

そのお手紙の中で、大胡太郎実秀の妻にあてたお手紙があるのです。それで私は、かねて、法然上人からこんなすばらしいお手紙をもらった女性のことを書きたいと思っておりました。

この大胡家のところは赤城山麓です。赤城山麓の豪族です。そこにいた一人の女性が道を求める心が深く、わざわざ法然上人にお念仏の教えについて尋ねる使者を立てた。どんな女性だったろうかと、すごく関心があったのです。

それで図書館に通いまして、大胡家とその周辺について調べました。是非この女性につ



いて書きたいと思つて書いたのが初めです。それが式子内親王からは入らなかつた理由です。式子内親王のときには、「なかなか法然上人が出てこなくて、編集部の者がしびれを切らしているから、早く法然上人を出してください」というご依頼がありましたね。

編集 そうでしたね（笑）。でもそれから、3章、4章、5章は法然上人の生きた時代の背景を書かなければと、先生がおっしゃっていて、ほんとに長い間法然上人が出てこなくて、私どもはひやひやしていたんです。

『平家物語』のお話をずっとお書きいただいたのですが、やっぱり、その時代というのが、法然上人を描くためにどうしても先生には必要だったわけですね。

石丸 そうですね。時代の中で、法然上人の念仏の教えもあるし、法然上人の悩みも、万民救済のみ教えも、時代の激動の中で生まれてきたと思うのです。

そして、法然上人の教えにはいろいろな積み重ねがあつて、例えば念仏信仰は、法然上人が創始したものではありませんよね。

その前には、善導大師がいらっしゃるし、それから、『往生要集』をお書きになった源信僧都がいらっしゃいます。そういう方々の流れの中で、法然上人が出てこられたのですが、法然上人とその方々とを分かつものは、やっぱり、時代があつたと思うのです、差し迫つた時代です。

それで、どうしても平家のことも書きたいと思つて、それで書かせていただきました。編集部の方がどれ程ひやひやされていたことでしょう。

編集 そうですね。ちよつと長かつたです。平成三年から始まつて平成八年の十二月まで、『平家物語』だったものですから（笑）。

石丸 私は、いろいろ資料を調べまして、平家の人々も法然上人のみ教えに帰依していたことは、間違いないと思っていました。

それは、いろいろなところで今まで書かせていただいたり、お話しさせていただいたりしたので、平家の人々は法然上人の教えによって救われたと思うのです。

あの法然上人のみ教えに接していなければ、平家一門の人々は、どんな思いで死んでいったらうと思うと、やっぱり、救われない気持ちがあるのですが、法然上人のみ教えにすがって、みんな南無阿弥陀仏を称えたのです。

『平家物語』を読みましても、「南無阿弥陀仏を称えるまで、しばし待て」と言って、首を切られ、そのようにして死んでいくのです。でも、確かに、長かったと思います。

編集 6章、7章が、熊谷次郎直実から源智上人、そして、親鸞さんという、法然上人のお弟子さんたちのお話を、ずっと取り上げてもらいましたが、書いていて何かお気づきになったこととか、お弟子さんのことで考えたことがありますでしょうか。

石丸 私は、勢親房源智上人にたいへん興味を惹かれました。

勢親房源智上人は平家の嫡流でありまして、そういう意味からも平家の人たちを書いて、それで源智上人につなげるという意味もあったのです。

源智上人には、初めはさほど関心がなかったのですが、大本山知恩寺に行ったとき、そこに所蔵しておられる国宝級のものを見せていただいたことがありました。

そうするとそこに源智上人の彫像があったのです。それ以前には源智上人といいますが、何かすごく背が高く、堂々とした大男、強くて丈夫な方という印象を持っていたのですが、

編集 源智上人は知恩院、知恩寺、金戒光明寺など、総本山、大本山の二祖です。開山上

人は法然上人ですが、法然上人は名前だけで、本当は源智上人が全部お建てになっているといつていいでしょう。

それに法然上人の一周忌にあてて四万人もの念仏結縁を行ってお作りになった阿弥陀如来像の話もありますし、先生がそういうイメージをお持ちになるのは、無理もないことだと思います。

石丸 でも知恩寺に参りまして、源智上人の彫像を拝見いたしましたところ、何かすごくかよわげで、きゃしゃで、優美で「ああさすが、平家の嫡流」と思うようなお姿なんです。私が今までイメージしていたのと全然違うお姿の、面影を残した彫像が残っております。それで、源智上人にすごく心を惹かれまして、源智上人についていろいろ調べてまいり、それで、小説を書かせていただきました。

編集 源智上人は石清水八幡宮との関係が非常に強いというようなお話がありますが、岩清水八幡宮の紀氏との関係というのは、どういうふうなものでしょうか。

石丸 これは、私の作家としての、というところ、おこがましいのですが、行き当たった結論といえますか、推理なんです。小説を書いていくところ、思ったのは、書きながらいろいろなものが見えてくるんですね。

エッセーとか評伝では、それが余りないんです。書きながら、その人の先のことが見え



る、その人の心中が見えるというのは、やっぱり、小説以外にはないと思いました。小説を書いていると、おのずから筆が押されていくんです。

それで、紀氏との関係ですが、私は源智上人のお母さんであつたと思えるようになりました。そして、源智上人のお父さんは、清盛の孫、清盛の長男重盛の四男師盛なんです。

そうすると、源智上人が、どうやって両親から生まれたかということをおこがましく、作家的想像力で推理したかといいますと、お母さんは、岩清水八幡宮のお嬢さんであり、紀氏であつたと推定します。すると、どうしてお父さんとお母さんが知り合つて、そこに源智上人が生まれたかということになるわけです。

そこでお母さんは、重盛の館、平家の館に、宮仕えといいますか、侍女奉公、女房として上がつていたのではないかと想定致しました。そして、そこで師盛の愛を得て、源智上人



を身ごもったのだと思うのです。

源智上人が生まれたのは一一八三年なんです。ちょうどその一一八三年というのは、平家が都落ちした年なんです。七月に都落ちしていきます。

編集 はい。そうですね。

石丸 それで、恐らくお母さんはまだ身ごもった直後で、師盛も、女房に身ごもらせたことを知っていたかどうか、そういう状況の中で、平家一族は都落ちしていったわけです。

だから、お母さんが師盛の子供を身ごもったというのは、誰も知らないで、お母さんは、実家の岩清水八幡宮に帰ったと思います。

そして、そこで源智が産まれました。だから知っていたのはお母さんと、お母さんの乳母とか、実祖父母ぐらいでしょう。そう推定したのです。

源氏が興っていた間、平家の一門の男子はみんな殺されていますから、清盛の直流、平家ゆかりとわかる人は、全部殺されているんです。それもひどい殺し方だったと言われます。

だから、女の人は気が変になってしまふほど、関係者が殺された。ものすごい殺戮であったということが、歴史上に残っています。そういう中を生き延びてきたということを考えますと、私のように推理するのが一番妥当じゃないかと、思っています。

編集 そうでしょうね、あり得ないですね、生き延びることができましたのは。

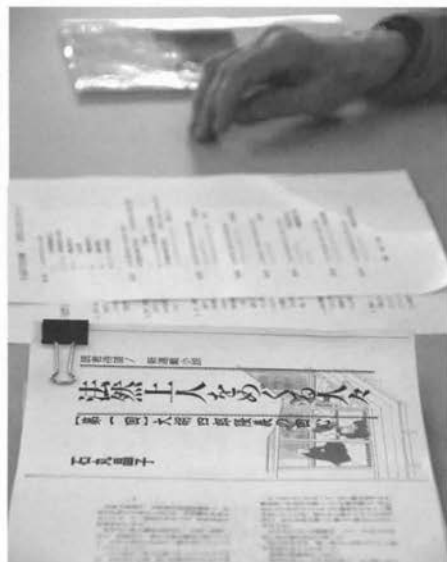
石丸 それで、法然上人のお弟子さんに正式になるのが、十三歳のときです。十三歳まで、実家の岩清水八幡宮にかくまわれていた。だけど、誰の子供かどうかは全然わからないし、お母さんが平家に宮仕えしている間に、父親は誰か知らないけれども、誰かと愛し合って、

子供が産まれたということしかわからない。

お母さんはもちろん、誰も、「これは師盛の息子だ」なんてことは、絶対に言えない状況でした。

それで、十三歳までかくまわれていたけれども、そのときに、その辺りも小説に書いたんですが、だんだん成人していくと、かくまいきれなくなつて、万一のことを両親とか、お母さんも、紀氏の祖父母たちも懸念して、都で名高い、学、徳ともに聖者と言われる法然上人のところに、源智を預けたのではなからうか、そのように私は思うのです。

(つづく)



寺院紀行

北海道・室蘭

満岡寺

撮影／タカオ力邦彦

文／真山剛



米寿を迎えた田河水泡先生が昭和62年に室蘭を訪れた時の記念写真。前列中央が田河水泡先生ご夫妻。最前列、右端が飯島現満岡寺住職とご内室としこさん。飯島住職は生前はご自宅、没後は墓参りをされるほど田河先生とは昵懇の間柄となった。

「いやいや、お待ちしていました。いつ取材に来てくれるかと待っていましたよ（笑）」

北海道室蘭の名刹、満岡寺まんけいじの飯島英徳住職は私たち取材班をこう言って歓待してくれた。

「実は先々代、先代も『浄土』の愛読者でしたね。バックナンバー揃っています」

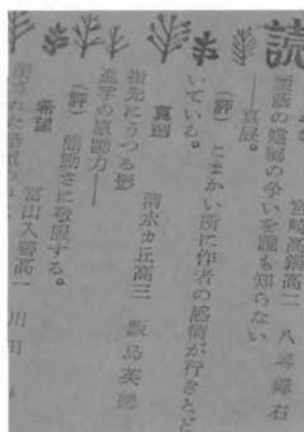
満岡寺の歴代住職が『浄土』の愛読者ということはつゆ知らず、ただ今の住職が『浄土』に毎号投句されていることから取材を申し込んだのだが、まさか愛読誌『浄土』の取材を待ち焦がれていたとは、こんなに嬉しいことはない。

「そして、これが頼まれていた俳句です」と今度は小さい色紙を差し出してくれた。

取材の日程や内容をお伝えする手紙に、今度の掲載に合わせ一句お読みいただけないでしょうか、とお願いをしていたからだ。そう、飯島住職の趣味は俳句。もし読者のお手元に『浄土』のバックナンバーがあれば、「浄土の広場」の浄土誌上句会の頁をお開きいただきたい。毎月欠かさず飯島住職が投句されている。昨年十二月号の句と、以前の句からいくつかを並べさせていただこう。

浄土誌に名遺し吉田絃二郎

その女や尼入道我が母よ



高校三年生の飯島住職が投稿した二行詩が掲載された「学窓」と掲載頁。

琴の音よ古き悲しき想いあり

そして巻頭カラー頁にも掲載してある、今回の取材のために詠んでくれた句が……。

金色の位牌拝みて歳を取る

いかがだろう、どの句からもとても強い想いが伝わってくるように思える。さらにバックナンバーを開いてみたが、飯島住職の句は、母への想い、僧侶としての日常、浄土への憧憬とテーマが一直線に並んでいて全くブレがない。こうした句に込められた想いは飯島住職の優しく律儀でひたむきな人柄そのもの、ということのようだ。

さて、満岡寺の歴史を伺う前に室蘭の魅力をお伝えしよう。取材前日、日が落ちる頃に千歳空港からレンタカーで室蘭へ向かったのだが、平成十年に開通した白鳥大橋から見渡す夜景はまさに絶景。北海道で夜景といえば函館が有名だが、町の灯りを楽しむ函館に対し、室蘭はご存じの鉄の町。製鉄所、製鋼所、製油所が立ち並ぶ夜景は、町の夜景とはひと味もふた味も違う。地上には整然と並ぶ照明の輝きにゆらめく炎と煙がアクセントとなり、そして何色もの色が重なりあう迫力ある建物壁、海上にはマストから緩やかに流れる灯火、そして空中には真っ白にライトアップされた白鳥大橋。思わず見とれる夜景だ。そして翌朝、室蘭の街中のホテルを早く出て地球岬展望台へ。ここは地球の丸さを実感できる絶景ポイント。そし

本堂奥にある納骨堂。



て室蘭の街を一望できる測量山展望台からは遠く有珠山も望める。とにかく室蘭には九つもの展望台がある、これでおわかりいただけるだろう。残念なのは、登別、洞爺湖と温泉地に挟まれていて、室蘭の夜景や絶景が埋もれがちなことだ。ご当地ラーメンのカレー味も札幌の味噌、函館の塩、旭川の醤油にひけをとらない……、と室蘭のPRはこのぐらいいにして、本題に入ろう。

室蘭最古の寺となる満岡寺の創建は文久二年（一八六二）で、正式な寺号は安祥院常照山満岡寺。開山が浄土宗大本山増上寺の名僧満岡上人で、その名前が寺名となっている。満岡上人は九州諫早の出身で江戸、芝の増上寺山内の常照院に住していたが、七十四歳の時に現在の本尊であるおよそ三尺三寸の阿弥陀如来立像を抱持して蝦夷の室蘭へやってこられた。その後、常照院に戻られて八十歳で遷化されたが、常照院には満岡上人時代の水鉢が今も残っているという。

さて、創建から十年経った明治五年（一八七二）、札幌と室蘭を結ぶ鉄道の開通、新室蘭港の開港に伴って満岡寺は移転することになる。かつての元室蘭、現在の崎守町にあった本堂を解体移築し現在の沢町に移ってきたのだが、この沢町を本拠地として地藏堂、太子堂、不動堂、観音堂、善光寺（後に善行寺に改名）と近隣に多くの説教所という布教拠点を置いて、数人の僧侶が大いに説教をして回ったという。当時は室蘭郡の通達により宗派を問わず、神官も含め



豆本収集も趣味のひとつで、写真は浄土三部経

ての幅広い布教活動が推奨、展開されていて、満岡寺も毎月三回、一の日には定例の布教を行い、門前も大いに賑わったという。今でこそ落ち着いた街並みだが、当時の満岡寺の門前には魚屋、果物店、豆腐屋、ブリキ屋、タバコ屋、そして味噌と醤油工場と、何でも揃う門前町だった。そして、明治十四年には明治天皇御巡幸の非常時御立退所になっている。さらに明治二十三年頃から不動講の信仰組織が信徒間にめばえ、明治三十二年七月に千葉県成田山新勝寺から御本尊の大聖不動明王の御身分が満岡寺に勧進され、毎年七月四、五日に行われるお不動さまの例大祭は室蘭最古の祭りとなった。ちなみに、現在も不動明王像は本堂脇陣に安置され、例大祭には法要が務められている。また、地名からもわかるように沢町は水が豊富などところでもあった。まさに移転後の満岡寺は新生室蘭のあらゆる面でその中心地となった名利なのである。

こうした満岡寺の興隆を担ったのが、第五世の飯島覺道上人だ。江戸時代末期に長野県に生まれ埼玉の川越蓮馨寺で僧侶となり、明治二十五年に二十七歳で有珠善光寺に入り、布教活動に従事、明治三十四年に同寺の住職となり、明治四十四年には法然上人御忌七百年大遠忌の大本山増上寺法主の御代理導師を努め、大正八年に満岡寺第五世住職になられた。四年後には官地三百坪の払い下げを受け満岡寺本堂を新築。昭和二十年に八十歳で遷化されるまで御前こぜんさま

測量山展望台から一望する室蘭。室蘭は地球の丸さを実感できる地球岬展望台など全部で9つの展望台がある風光明媚な地だ。



と呼ばれ檀信徒に大いに愛された住職だった。

その後を継いだのが、奈良大道第六世住職だ。奈良住職は明治四十四年富山県生まれ、幼少の頃に北海道積丹の奈良家に入籍、その後には先々代飯島住職に弟子入りする。奈良住職は飯島覚道上人が御前さまと呼ばれたのに対して、方丈さまと呼ばれたが、戦後の満岡寺を大きく発展させた住職で、満岡寺ホール新築、納骨堂新築、本堂増築、参道整備、納骨堂檀徒ホール再築と五十年に及ぶ在位期間中に満岡寺の伽藍を整え、また各種役職を務められ、大沢町の善行寺の住職も務められてきている。

その奈良住職が大正大学を卒業した秋に先々代飯島住職の一人娘照子さんと結婚、昭和八年に現住職が生まれる。しかし、男の子が産まれたら師僧であり先代である飯島住職の養子に出す約束があり、現住職は奈良姓から飯島姓となる。その後三人の女子を産んだ照子さんが、昭和十五年に病死されてしまう。飯島住職七歳の時だった。飯島住職は祖父である先々代から読経を教わったこと、小学校三年ぐらいから檀家回りをしたことなど、幼少時代のことをよく覚えている。母が愛読していた『婦人倶楽部』の別冊付録「凸凹黒兵衛」(のらくろで有名な田河水泡作の黒うさぎが主人公の漫画で)を母からもらい、まだ字が読めないながら絵を楽しんだことが母の大事な思い出の一つで、今も大切にその本を持っている。そし



室蘭新駅舎、旧駅舎も残っている。

て、その本と母の面影が重なり、大正大学時代に東京御徒町の松坂屋の「少年倶楽部」のらくろ展」で田河水泡に色紙にサインをもらった上にかみなりの絵を描いてもらっている。そして、「のらくろ」熱は母への想いとともにもますます高まり、発行元の講談社に嘆願して「のらくろ」を全巻揃え、田河先生との交流はどんどん深まり、昭和六十年に田河先生が室蘭を訪れた時に学生時代にももらったかみなりの絵の色紙に落款を押してもらったという。田河先生にしても、およそ三十年前の自分のサインとの再会となったわけだ。そして、飯島住職は四度も室蘭を訪れてくれた田河先生の東京町田の玉川学園の自宅へも伺っているし、没後には多摩霊園にお墓参りにも行かれています。何事も一筋の静かな熱血漢なのである。

その飯島住職は大正大学で浄土学を学び昭和三十三年に僧侶となり、昭和四十一年より先代住職の養母が一人住んでいた善行寺に居を移し、昭和五十四年には善行寺の住職となる。そして、平成六年、先代奈良大道住職遷化にともなって満岡寺第七世住職となった。そして平成十五年には現在の本堂を建立、翌年には中興・開山号を授与されている。

「住職はいまだに母への想いで生きていますから……」と奥さまのとしこさん。そう言う奥様も室蘭から少し離れた白老の商売家に生まれ、十四歳で母を亡くされている。二十三歳で満岡寺にお嫁にき

輪西にある善行寺。飯島住職が兼務している。



たが、その理由は「お寺はお米があるから」。そして、ある時、母の字が好きで実家から持ってきた母の卒業アルバムを見ていたら、なんと住職の母と自分の母が室蘭高等女子学校の同級生だったことがわかったという。その時の驚きはもとより、そのことが同じ境遇の二人の絆をさらに深めたという。

そうそう、高校時代のエピソードを忘れてしまった。高校生のための『學窓』という学参誌の読者文芸欄の二行詩コーナーに住職が高校三年生の時に応募した作品が掲載された。「真剣」という題で「指先にうつる影 進学の原動力」という二行詩で、作品評に「簡勁さに敬服する」とある。

幼くして亡くした母への供養の為に仏道修行に励み、『浄土』に会え、その『浄土』誌面で吉田絃二郎に会え、そして母の導きで田河水泡先生に会えたことを喜びとする飯島住職。その実直さは若い頃から変わることなく七十八歳の今日まで続けられている。

日々、先代と母の位牌、先々代の位牌に手を合わせ供養している飯島住職。風光明媚な室蘭は俳句に詠む素材に事欠かないはずだが、飯島住職はこれから変わらず父と母、そして仏道への想いを詠み続けていかれるのだろう。そうした飯島住職ならではの句を、この『浄土』で拝見し続けられるは大いに楽しみなことである。

(ルポライター)



実直なお人柄が滲み出ている満岡寺、
飯島英徳住職。

連載

会いたい人 関 容子



串田和美
さん

②

撮影／タカオカ邦彦

串田さんヒストリーを見て行く上で、俳優養成所から文学座、やがては自由劇場へといつも身近にいた吉田日出子の存在を抜きにしては語れない。

彼女があるインタビューで、「影響を受けたのは美空ひばり。ヘンで刺激的で奇妙で不思議で……何か特殊な生き物みたい」と話していたが、この形容はのちの自由劇場のマドンナたる女優吉田日出子にそのまま当てはまる。

「僕は高校を出て日大の芸術科に入ったけど何だかつまらなくて、来年は俳優座養成所受けようと思つて、そこで出会ったのが日出子さんです。お互いにまだ十代。そのころは彼女もそんなに突出した感じはなくて、演技の実習で意味もなく泣けとか笑えとか言われるのは苦手だったらしいけど、そのうちだんだん頭角を現してきて、千田是也さんに本公演の子供の役とか娘役とかに抜擢されてましたからね」

養成所を三年間で卒業し、昭和四十年、二人は文学座に研究生として入る。その少し前には文学座から芥川比呂志や岸田今日子などが大挙して去る分裂事件があったばかりだった。

「面接のとき、演出家の木村光一さんから、君たちすぐ辞めないよね、つて念を押されたのにじきに辞めたし、木村さんも結局あとで辞めるんだけどね（笑）。

文学座で僕は樋口一葉の『十三夜』にせりふのない少年役で出たのが初舞台です。貧乏な家庭から金持ちの家に嫁いで屈辱に耐えられずに戻ってくるおせきの弟役。最後にちよつと出るだけ。おせきが落ちぶれた昔の恋人の人力車から降りてしみじみ語り合つて、二人で歩いて立ち去つたあとに、僕が袴はいて、肩から白いカバン下げて、薄（すす）を持って、口笛で鉄道唱歌を吹きながら舞台を通りすぎて幕、というものでしたね。

日出子さんのほうは、水上勉さんの『山壁』

自由劇場「上海パンスキング」の楽屋での串田さんと吉田日出子さん。(撮影/タカオカ邦彦)



という芝居でかなりいい役がついた。僕もしやべるのが不自由で足の悪い男の役で実は水上勉さんに特別にほめられたんですけどね……。

日出子さんは山の小娘の役で、あの小っちゃい体で子供みたいな顔した人が箆を背負ってただフワッと出てくるだけで、不思議な空気が漂い出して舞台の四角い空間を総て支配してしまう感じになるんだな。袖で杉村春子さんや荒木道子さんがじっと見てて、あの子の芝居、面白いのよね、って言ってました。だから辞めると言い出したときは、すごく怒られましたからね」

まず、草野大悟、岸田森^{しん}、悠木千帆（のちの樹木希林）が辞めて六月劇場を作り、続いて串田、吉田、清水鮎治が辞めて、斎藤憐や佐藤信と共に自由劇場を旗揚げする。

「このときにデコ（日出子）の言ったことがすごい。私の才能は、自分であれこれ考えたりはできないんだけど、いいなと思って一緒にやるべき人を見つけ出すのは天才よ、って」

これは殺し文句！

「ついこの間、全盛時代の自由劇場のドキュメントを、座・高円寺で観てきたけど、若くてツルツルした肌のデコが若者たちが次々に言い放つ理屈っぽい演劇論を聞くうちに、ひと言言う。何だかわかんないよ、あんたたちの言うこと。わかるのは、あんたたち可哀そうだな、っていう気がする……。そしてら熱弁ふるってた若者たちが絶句しちゃってね（笑）」

こちらは『裸の王様』の無垢な眼をした少年のよう。

自由劇場発足まで、当時まだ工事中だった地下鉄六本木駅の階段に集って、場所や資金集めの相談をした。まるでブロードウェイ・ミュージカルの舞台みたいだ。

「ある夜中、ガラス屋のビルの地下に降りる戸があいてて、暗い階段を降りてたら、水が少したまってたけど、ドラムセットが置いてあった。あとでわかるんだけど、ガラス屋の息子さんが日芸（日大芸術科）に通ってて、そこをドラムの稽古場にしてたんだね。三十坪足らずの狭い場所だけでもみんな気に入っ

て、ここで芝居しよう、ということになるんだけど資金がない。しかしデコのお母さんの知人が何百万か貸してくれたり、オーナーのおばあちゃんが芝居好きで待つてくれたりしたんで、そこを劇場に改装して、間もなく柿落し、旗揚げに漕ぎつけることができた。届けは一応八十人定員なんだけど、大当りのときは二百人近くも入って、もう酸素が足りないから大きな声出せないで、ハーハー言ったりしてましたね（笑）」

旗揚げが佐藤信の『イスメネ・地下鉄』、二作目がベケットの『ゴトーを待ちながら』だったけど、当時劇団民芸が上演権を持つていてピランデッロの『ヘンリー四世』に変え、おかげで僕が主役になった。

串田さんの傑作『もつと泣いてよ、フラッ

パー』や斎藤憐の代表作『上海バンスキング』で評判を呼ぶのは十年程あとのこと。

「バンスキング」が大当りして、銀座の博品館でやってくれないか、っていう話が来たときも、今の若者ならすぐ飛びつくところだけど、どうする？　ってみんなで顔を見合せちゃってね。あのころは先のことなんて本当に考えてなかったなあ。当時の若者たちのそういう生き方が別に珍しいことでもなかった。今はみんな計算するし、そのお手本もあるけど、あのころは世の中がどうなるかわからなかったから、みんな明日くらいまでしか考えなかった。もしかしたら一生あの六本木で芝居してたかもしれないし、それがいやだとも思わなかったし、どうする？　って考えて、もうちょっと世の中に出て行こうか、って決心して博品館に出たわけです」

私はあのころの息苦しい狭い劇場で観た『もつと泣いてよ、フラッパー』がとっても好きだ。お洒落な店のワンピース・ランチ

のように、色とりどりの料理がきれいに盛りつけられているようで楽しかった。

串田さん演じるギャングのボス、アスピリンが小娘のフラボー嬢からもらった嘘の恋文に舞い上がるのは『十二夜』のマルヴォーリオ（よりは純情だが）みたいだし、小日向文世のコミ帝国皇太子がサーカスのお天気サラに恋して道化になり下がる話は、デートトリッヒの映画『嘆きの天使』を思わせる。しかし圧倒的にチャーミングだったのは、吉田日出子のトランク・ジルで、彼女に魂を奪われる八百長ボクサー、クリンチ・チャーリーの末路も哀れだった。せりふも何となく古い翻訳調で、今では総てがセピア色の思い出だ。

「トランクを上からゆつくりゆつくり、水の中に沈んで行くように落してくれ、って言つて、そこにジルが登場するんだけど、デコに疲れ果てて出てきて、とかリアルに言っても伝わらない。まるでひしゃげた紙が風でフワッと舞い上がるように出てきて、って言うと、

たちまち目が輝き出して、わかった、って言う。あるときは、普段見えないようなワタボコリが、日の光があるためにフツと飛んでるのがわかるような存在、とかね（笑）。すると彼女の芝居が現実の人のようにも、影の人のようにも見えてくる。こうしていろんなことを言い合って、共通の感性が生まれてきたんだと思う。

この『フラッパー』を新しいキャストで再演、という話もあるんだけど、ひと月足らずでこの感性を伝えようと思ってもね、多分無理でしょうから新しい発想でつくらなければね」

そしてもう一つ、私の好きな自由劇場時代の作品は、斎藤憐作、串田和美演出・美術の『クスコ』。こちらは平成五年のクーンで観た。

クスコは皇太子妃になる自分の娘につきそって行って、母親のほうが皇太子に見初められ、ここに愛の叛乱が起こる。妖艶な魔性の

女を演じる吉田日出子が首を振りながらくねくねと舞台を滑るように歩く姿が印象的だった。

「あの芝居を僕は歌舞伎でやりたいと何年か前に思ってたね、クスコを玉三郎、皇太子のアテノを染五郎、弟のカミノを勘太郎（現・勘九郎）、阿呆を装っている末弟のイヨノを七之助、って配役まで考えたけど、いろいろあつて実現しなかった。クスコは中年で、妖しい色気があつて、最初は権力に反感を持っていたのに途中から権力欲にめざめて行く、という面白い役で、女方が演じたらまた別の味になると思うけどね。

しかしデコのクスコのあの独特の動きも素晴らしかった。彼女は実はものすごい努力家だね。なんであんなに稽古するかというと、舞台の上で自由になりたいからで、そのためには人の何倍も稽古しなくちゃならないわけです。だから稽古しない人のことを怒るんですよ。でもあれほど稽古してても上がり性で、

初日なんか幕があく前にチラッと見ると膝がガクガクふるえていたりする（笑）。それで舞台に出ればまるでアドリブで演じてるみたいな自由な感じになるんですよね」

自由劇場はさまざまな演劇人や演劇グループを輩出しながら、発足以来三十年で一応の区切りをつけ、解散となる。

柿落しの逆だからというので柿上げと洒落



自由劇場の稽古場の串田さん。30数年前。
（撮影／タカオカ邦彦）

最後の公演は平成八年七月、演目はピントーの『ダム・ウェイター』。串田さんと笹野高史の二人芝居だった。

ようやく切符を手に入れて地下へ降りて行くと、満員のお客を前にして串田さんが劇中のナイフ投げの稽古をしながら、知った顔にちよつとうなずいて挨拶したりしていた。

「あのときは連日超満員で、特に楽日なんかじつに華やかだった。幸四郎さんもいればジ

ユリー（沢田研二）やいろんな役者がいて、客席も芝居みたいで夢のような空間でしたね。これで終りとなるとみんな去りがたくて、飛び入りで歌ったりひと晩中パーティーみたいに騒いで、劇場としては幸せな終幕だったと思う。

いよいよそこを去るとき、黒い壁に白いチヨークで1966〜1996と書いて行ったんだけど、僕は次の日からNHKの仕事で南アフリカに行つて、一か月して戻つて夜中に六本木へ行つてみたらもう中をこわしてて、工事の道具なんかも置いてある。懐中電灯を頼りに降りて行くと、ひと月前のあの賑わいとは打つて變つて、ブラーンとコードが垂れてたり、百年も経つた遺跡みたいだった。でも、壁に書いた僕の字はそのままあつて、自分の人生もここでひと区切りしたなあ、という何とも言えない気分になつて、しばらくその場に立たずでいましたね」

その後しばらくヨーロッパを放浪して、結

婚という新しい生活がはじまる。

「まあね（笑）、最終公演のときの写真を連日撮つてたのが今の女房で、三十年下です。彼女は日芸を出て写真撮り始めたところに篠山紀信さんに声をかけられて、彼のモデルをやりながら写真も教わつてたんだけど、撮られるより撮るほうがやっぱり好きで、写真家の道に専念していた。僕はそんな年齢になるまでやるのが一杯あつて毎日忙しくて、結婚してマイホームとかいうのが男としていやだったわけね。でも今はよかつたなと思つてます。子供も生まれました、僕が芸術監督をしている松本なんかに行くと屋上から山がよく見えて、少年のころ親父と山で静かに過した好きな時間がよみがえつてくるしね」

何年前か前、モリエールの『スカパン』をグループ座で観たとき、更にその十何年前か前、コクーン（Cocoon）の『スカパン』で七之助が演じたあの子供の役は……とブログラムで探したら「串田十二夜」とあつた。え？ 十二夜とは

洒落た芸名！ とすっかり感心した覚えがある。

「いや、十二夜は本名です。でも外国へ連れてくと、みんなジュニアのことだと思うけどね。生まれたとき、本棚の背表紙をずうっと見て行ったら『十二夜』という文字が目飛びこんで来て、それを名前にした。今、十三歳。芝居にはいろんな難関があつて大変なのをいつもそばで見てるから、今のところ演劇をやる気はないようです」

串田さんは今年七十歳になった。

十代のころ、生あるものは生まれた瞬間から死に向つて歩き始めると知り、切なくて怖くて、星を見上げて泣いたという。

この十月に上演した『K. ファウスト』は、長年の課題だった「世界は週末に向つているのに、人の欲望は限りなく。われわれは知らない間に恐ろしい代償を求める悪魔と契約したのではないか」というテーマで、独自の

(K串田)『ファウスト』を書いたもの。

「子供のころの山登りの思い出とか、紙芝居の話とか、ハンバーガー片手にヒッチハイクするとか、全部入れて、僕のファウストにしたんです。パリでオーディションした現代サーカスの人たちとか、cobaの奏でるアコーディオンとか、賑やかで寂しくて、お祭りみたいだったでしょ。ゲーテの原作はキリスト教の宗教思想に基づいてるけど、僕のはまったくそこから離れた現代劇です」

ファウストを演じたのは笹野高史、メフィストフェレスが串田さんでちよつと意外な配役だったが、舞台を観て納得がいった。串田さんがファウストでは、あまりに一人称演劇になつてしまう。

「演劇つて総て嘘なんだけど、嘘という表現を使つてその先にある真実がふつと見えたように錯覚する瞬間が、芝居の面白さなんじゃないかと思う。この間、久々に『天井桟敷の人々』をDVDで観て、あれは背景も全部書

割りで嘘だらけなんです。でもものすごく美しい。このニュアンスが無意識に僕の作る芝居の中に入ってるんだな、と思いました」

ところで、串田和美十九歳の処女戯曲が最近発見されたそうだが、荒筋を伺うと既に十分、現在の演劇観に基づいている。

「友だちがガリ版刷りの台本を送ってくれたんだけど、高校を卒業した年に、斎藤憐たちと『エピソード、プロローグつきの三つの話』というのを書いて一日だけ上演した。三鷹の国際基督教大学キリストのホールを借りて、出演者は寄せ集め。懸命に切符売ってでも赤字だったけど、楽しかった。斎藤は彼らしくロシアの革命家とスパイの話を書いて、僕のは『太陽と泥棒』という芝居。二人の泥棒が北の国へ行ってどんどん稼ぐけどつかまらない。ヘンだと思つてると、そのうちワアーツと人が集つてきて歓迎されて、この国には太陽がないからどんなものか教えてくれ、って言われる。

それでキャベツに竿を突きさして、こうやって東の空から顔を出して、キラキラ光り輝くんだよ、つて言つてると、キャベツが本当にキラキラ輝き出す。ああ、太陽だ太陽だ、つて、その泥棒は教祖様みたいになって行く。もう一人の泥棒は、あれは太陽なんかじゃない、ただのキャベツだ。オレ達は神様なんかじゃなくてただの泥棒だ、つて叫び続けて幕になるの。面白いでしょ？ 僕はもちろん叫んでるほうの泥棒役（笑）。来年の六月、松本で若い人たちがこれを上演する話があつて、とても楽しみにしてるんです」

つまり、串田さんはもう十代のころからリアリズム演劇に対する強い抵抗感があつたことがわかる。

「リアリズムがいいんだつたら、道端で本物の人間眺めてるほうがよっぽど面白いかもしれない。やっぱり芝居は人間が感性で作り上げたものが美しいと思いますね」

（この人おわり）

人の生を 受くるはかたく

やがて死すべき者の いま生命あるはありがたし

正法を耳にするはかたく

諸仏の 世に出づるもありがたし

(初期經典『法句經』 182 ※友松圓諦訳)

また新しい年がやってくる。

いや、こうした受け身的「あたりまえ」的表現はよろしくない。新しい年を迎えることができそうだとすべきであろう。歳を一つ、無事に重ねられることに、そしてそれは、日々暮らせてきた、その積み重ねにこそあるという事実に感謝しなければならない。のだが……。

あくまで一身上の理由からであるが、平成24年という年は公の面でも私の面でも、何につけバタバタと慌ただしかった。もちろん、誰かと比べてということではない。自分よりはるかに忙しい人はいくらでもいる。あくまで、それまでの自身の上で比較してのことである。自分としては精いっぱい考え、動いているつもりだったが、さまざまなが次から次と起こり、事がはかどらない。すぐ脇を、何かが薄笑いを浮かべながら横目で通り過ぎていつているようにさえ思え、恨めしかった。人生とはそういうものだと言えそれが真理だろうし、仏教者としてそんなことも知らないのかと叱責もされそう。そもそもキャバの低さと要領の悪さが大きな理由であることは承知している。どうしてもネガティブな見方が先行していた。

「またか……」「なんでこうなんだ……」

ため息とほやきを、ずいぶんと家人に聞かせてしまった。ピリピリしたオーラを発していたらしく、子どもたちもかなりナーバスになっていたことには気づいていた。悪いとはわかっていたが、気持ちを切り替えることが出来なかった。「慌しい」「忙しい」と愚痴るのは、「ト（こころ）」が「荒れている」、「ト」を「亡くした」証拠だと、教えてくれているではないか。まさにそのとおり。

秋、所用で被災地石巻の寺院にうかがった。九月十一日だった。一年前の同時期に訪れたときと比べ、海岸縁に積まれている瓦礫の山は確かに低くはなっていたが、全体的には「あまり変わってないな」という印象を受けた。前日からテレビや新聞では、「あの日」からちょうど一年半が経つことで一つの区切りを迎えるとするような報道が、盛んになされていた。

そのお寺にお参りに来られていた、子どもさんを津波で亡くしたという複数の親御さんと話すことができた。

「もう一年半がたった、節目の日を迎えた」。昨日から、テレビも新聞もそんなニュアンスばかり。私たちには「もう」ではないし、節目なんてない。今もあの日の、あの時刻で止まったまま。子どもの死は受け入れられていない」

「子どもと過ごした十二年間は妄想で、今の、この辛い毎日だけが現実なのではないか……そんなふうには思えません」

かき消してしまいたいであろう苦しい胸の内を、初対面の筆者に吐露してくれたのはなぜだったか。本来なら、信頼できるかどうかともわからない、しかも数時間で帰ってしまいうような人間にそんなことは話したくはないはずではないか。きっと誰でもいい、話したかったのかもしれない。話さずにはいられなかったのかもしれない。

報道からではわからない真実、そして答えがあるのかどうなのかわからない難問。筆者には満足な返答は、ついに見つからなかった。「そうですね……」を小さく繰り返していただだけの無力な自分だった。親御さんの頬を伝っていた涙を正面から見ることに耐えられず、下を向いてハンカチで目を押さえていた。あの親御さん方は、どんな思いで新年を迎えられることだろうか。少しでも心に落ちつきが取り戻せていますように……そう祈るしかない。

師走になったばかりの頃、震災のニュースを見ていて、ふと親御さん方のお顔が思い出された。恥ずかしさと申し訳なさと同居しながら、残りわずかとなった年末を過ごしている。

(小村正孝)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第三十八回

第二部

ライオン
来江の古城遥かなり

「金色夜叉」が呼び寄せた今再びの奇縁



小波は、尾崎の紹介で博文館の社員となり同社が発行する「少年世界」の編集にたずさわりながら、作品を発表。ある日、尾崎に連れられて、文人墨客が集う芝の高級料亭「紅葉館」でミツコの同僚女中の中村須磨と出会い恋仲になる。しかし、小波が京都の新聞社に単身赴任している間に須磨は博文館の若社長・大橋新太郎に心変わりしてしまう。これを知った紅葉が激怒、紅葉館に乗り込んで須磨を足蹴にする。これが真相である。

すなわち、主人公の苦学生・間貫一のモデルは巖谷小波、貫一の許婚・宮のモデルはミツコの同僚の中村須磨、そして宮を妻にする富豪のモデルは博文館の若社長の大橋新太郎。ただし、芝の高級料亭「紅葉館」は「熱海の海岸」に、またその熱海の海岸で貫一がお宮を足蹴にする場面は紅葉自身の紅葉館での所業を小波のそれに脚色したものであった、と。

聞き終えた哲人伯爵は海旭の顔を覗き込んだ。「なるほど、それが真相とは……。しかし、なぜ貴兄はそれほど詳しいのだ」

「実は私も……」と海旭は一瞬言い淀んでからおずおずと返した。「この小説にはある奇縁があるのです」

哲人伯爵は眼に好奇の色を宿して身を乗りだした。「ほう、コヨークワンに見初めた女性でもおったのか」

海旭は頬を赤らめて、顔の前で風が起きそうなほど大仰な仕種で手を振った。「めっそうもない」

「だったら、聞かせてはくれぬか」と哲人伯爵は促した。今度は伯爵が東洋の学僧の卵と奇縁のつながりを予感する番だった。

海旭は先ほどまで回想にひたっていた一端を披露しようと目を閉じた。すると、口減らしのため寺に預けられたものの、住職が高齢と困窮のため寺を出るはめになった十五歳の春のことがまざまざと甦ってきた。

甦る博文館の小僧時代

海旭は、博文館という出版社を立ち上げようとする野心家・大橋佐平を住職から紹介され、本郷弓町に大橋が自宅兼事務所として借りた長屋に住み込むことになった。大橋は加藤弘之など有名文化人を次々と訪ねては、原稿や論文の転載をとりつけ、これをまとめた『日本大家論集』を創業第一弾として発刊したところ大当たり。これに勢いを得た佐平は、実に二日に一冊という恐るべき頻度で、十年たらずの間に千点を超える書籍を刊行。やがて『太陽』という雑誌で当てるや、『少女世界』『少年世界』『幼年世界』『幼年画報』『新青年』『中学世界』『女学世界』『農業世界』『文芸倶楽部』『講談雑誌』『探偵小説』『野球界』など年代別・分野別の雑誌を次から次へと送り出し、押しも押されぬ大出版社へと飛躍をとげる。

さらには、町の本屋と出版社を取次ぐ部門

として東京堂（トーハンの前身）、出版物を宣伝する広告会社として内外通信社を設立。ついには博文館印刷所（共同印刷の前身）を創業して、後の世でいうマルチメディア王、総合文化起業家に成り上がる。

こんな博文館の黎明期に、海旭は下働きとして徹底的にこきつかわれた。とても当初期待していたような己の知を磨く営みとはほど遠かったが、日本の知と文化の近代化の黎明をもっとも身近で体験できたことは、それはそれで興味ぶかった。

海旭は一番年下の小僧として、佐平の尋常ならざるエネルギーに圧倒されながら、雑務に追われているある日、有力雑誌社や新聞社をまわって、雑誌や書籍を買い求め、それを積んだ荷車を引いて、本郷の本社へ汗をふきふき運び込もうとしたときだった。海旭より年上の男連れ三人が、ちょうどやってきた。

その後、若き客人たちは、若社長の大橋新太郎をまじえて、応接室で酒を酌み交わして

歓談になった。海旭は、呼ばれて追加の酒をもつていくと、ちょうど尾崎紅葉が巖谷小波という小説家志願を若社長に紹介をしているところだった。

「ただ、持ち込んできた小説は、甘ったるくてまだまだ青い」と紅葉は断じた。

「どこが青いのですか、甘ったるいのどこがいけないのですか」と小波は口先を尖らせ、頬を赤くして反論した。

若社長はこれに好意をおぼえたらしく、「そうか、世の中は大人向けの戯作ばかりだから、これからは子供むけはあるかもしれない。機会をみて親父の佐平翁に相談をして、売り出しを考えてみるか」と言う、「諸君、酒も切れたから、これから吉原にでも繰り出すか。私がおごろう」と誘った。

一番年長の美妙が「小波は、まだ子供だからむりでしょう」と返すと、小波に向けて言った。「お前は女を知っているのか……」

すかさず紅葉が茶化した。「子供向けの純

愛の小説がかけなくなってしまおうぞ」

ますます顔を赤くする小波に、紅葉と美妙と若社長は腹をかかえて笑うのだった。

海旭は、客人が散らかしたまま去った宴の跡を始末して、なにか苦いものを感じながら、応接室を後にした。生活のためとはいえ、この世界にいつづけることは果たしていいのだろうか。それまで忙しさにかまけて仕事の意義を考えるひまもなかった海旭だったが、この日の出来事で、文明開化の花とまではやされる出版文化の世界に距離感とむなしさを感じるようになった。そんな想いが日々つづり、海旭はついに辞めることを決意。わずか一年ちよつとの出版社勤めであった。海旭は小石川は初音町の源覚寺の住職・端山海定の下で得度、ここから現在にいたる学僧生活が始まるのである。

巖谷小波は、海旭が辞めた二年後の明治二十四年、博文館の『少年文学叢書』に「こがね丸」を発表、これが好評を得て、児童文学

者として華々しくデビュー、一躍有名になる。以後博文館と組んで児童文学作品を発表、日本を代表する児童文学者の嚆矢^{こうし}となった。

また、美妙も紅葉も硯友社同人として、明治二十八年に博文館の文芸雑誌『文藝倶楽部』などを活躍の場として、文壇で名声を不動のものにしていく。

また大橋新太郎は、博文館の創業者で父親でもある大橋佐平の跡を襲って、社長に就任、社業を大きく発展させ、大日本麦酒、日本硝子、日本郵船、王子製紙など大手企業の役員を歴任、東京商工会議所の理事をつとめたのち、衆議院議員、貴族院議員にもなった。

海旭は、紅葉、美妙、小波、新太郎の活躍を知って、四人との印象深い出会いをなつかしく感じたが、もう少し博文館にいたらよかったとは露ほども思わなかった。むしろ博文館を早々とやめるきっかけになって、虚飾の業界から早く足を洗うことができてよかったと思った。

あの出会いから十年後、明治三十年に紅葉が『金色夜叉』を発表。これで紅葉は不動の名声を確立するが、実はあの時の四人のうち三人がからみあったモデル小説だったと海旭は知って、その想いをいっそう強くしたのだ……。

と、そこまで海旭の回想が進んだところで、遠いところから哲人伯爵の声がした。

「さあさあ、わが妻が関わる物語に貴兄がどう関わっているのか、聞かせてくれたまえ」
恐らく海旭の回想のため会話が途切れたのは数分だったろうが、海旭はあせって言葉を返した。

「ご令室も関わっていた小説を生むことになった虚飾の世界、その片隅に実は私もいたことがありまして。十台半ばの小僧の頃ですが、子供心にどうしても馴染めそうにない、いや、このまま馴染んではいけないという気がして、わずか一年で辞めて仏門に入ったのです。し

かし、今にして思えば、かつて虚飾の世界に身をおいていたことは、私の今にとって大に意義があつたと思つています」

慌てたために経緯をはしょつて結論だけを言つてしまい、真意が届いたかどうか不安だつたが、哲人伯爵は持ち前の直感で十分に理解したようだった。

「そうか。それは大いに結構。大いに同感だ」哲人伯爵は大きくうなずいた。「日本から帰国した私は父の急死で外交官を辞めることになり、田舎に引つ込んでの読書三昧。おかげで仏教と哲学をきわめ、こうして斯界の碩学泰斗とも交わることができた。辞めてよかったとつくづく思う。父の死は残念だが、人生の転換点を与えてくれたことに感謝をしている。貴兄が一時席をおいていた出版業も相当だろうが、外交の世界も虚飾の極みだ。唯一よかったのはわが妻ミツコと出会えたことだけで、もっと早くやめておけばよかった」「それにしてもお互い、他人とは思えないほ

ど似通っている」と海旭が感慨深げにいうと哲人伯爵も深くうなずいた。

今まではそれぞれ別々だった東京は芝の料亭をめぐる二人の奇縁は、今やしつかりとつながり重なつていた。

哲人伯爵はふーつとため息をつくと目をつむつた。どうやら父の後を継いだボヘミアの広大な領地に聳えるロンズベルク城での哲人生活の回想に入つたようだった。海旭も哲人伯爵に付き合つて、博文館を辞めてから浄土宗学支校での勉学三昧の回想へと没入した。

おそらく周囲からするとさっぱり会話がはずんでいないように見えたかもしれないが、当人同士は言葉は交わさずとも思索的な交流ははかられ、いたつて満足だった。

(この項つづく)

謹賀新年

平成二十五年

浄土門主
総本山 知恩院 門跡第八十八世

伊藤唯眞

大本山 増上寺
法主

八木季生

大本山 百萬遍知恩寺
法主

服部法丸

〒606 825 京都市左京区田中門前町一〇三

大本山くろ谷金戒光明寺
法主

高橋弘次

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

宮林昭彦

鎌倉市材木座六・十七・十九
TEL 〇四六七 (一一一)〇六〇三

大本山清浄華院
法主

真野龍海

浄土宗宗務総長

豊岡 瞭尔

法然上人御誕生地

美作 誕生寺

〒709 3602 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL 〇八六七 (二八)二二〇二
FAX 〇八六七 (二八)二二六二

学大乘淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川匡俊

〒174 8645 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園

理事長
校長 麻生諦善

謹賀新年

平成二十五年

養蓮寺

田中光成

〒194-0032 町田市本町田三六五四

大鹿山弘経寺住職

金田進徳

〒302-0023 茨城県取手市白山二・九・二八

十八増林聖徳会
吞龍上人祈願所

蓮馨寺

住職 衆原恒久

〒350-0066 川越市連雀町七・一
電話〇四九(二二二)〇〇四三
FAX〇四九(二二六)〇六七六

赤坂六地藏尊

浄土寺

住職 阿川正貫

〒107-0052 東京都港区赤坂四・三・五

鶏頭山安楽寺

飯田實雄

〒399-4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五
電話〇二六五(八三)一二三六〇

清水湊

忠高山
實相寺

家康公祖母の旧地

玉桂山
華陽院

住職 堀田卓文

勝願寺

〒365-0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八(五四一)〇二二七

お骨仏の寺

一心寺

〒543-0002 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九
電話〇六(六七七)〇四四四

謹賀新年

平成二十五年

白本尊阿弥陀如来

静岡
宝台院

住職
野上智徳

〒112-0002

東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山
傳通院

電話〇三(三三八一四)三七〇一(代表)

九品阿彌陀如来

淨
眞
寺

〒158-0083 世田谷区奥沢七・四一・三
住職 清水英碩

願行寺

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二・一・二二

大吉寺住職

成田昌憲

〒154-0017 世田谷区世田谷四・七・九

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四・二・二八
電話〇四六七(二二二)〇七〇三
FAX〇四六七(二二二)五〇五一

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四・二二・八

光取寺

大室了皓

〒141-0021 東京都品川区上大崎一・五・一〇
電話〇三(三四四一)八三八四



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。



浄土誌上句会

●子

〔特選〕
みな迷子めいて秋日の鷗外居

竹橋一平

いくばくかの入場料を払って家に入る。あちこちのぞいて回る。鷗外居であろうとどこであろうと、どの部屋も見落としては損だとはかりうろろする。「迷子めいて」は、言われてみれば正にその通りである。

〔佳作〕 冬どこれや硫黄の強き子宝湯

齊田 仁

男子誕生初春の光の中

石原 新

冬みづらら漁村に子等の声聞かず

増田信子

●規

〔特選〕
規則あるものの如しや冬支度

山内桃児

着るもの一つ取っても、衣更えがあれば後の衣更えがあり、制服などは忠実に守って出勤する。行事その他、四季それぞれに決まり

が多い。冬支度にしても、その規則に乗って
のこのように思われるのである。

〈佳作〉

子規の忌にあらためて引く季語辞典

早乙女喜栄子

不規則な暮らしになれて冬に入る

井村善也

軒永柱定規持ち出し計る子等

浜口佳春

●自由題

〈特選〉

浜風に吹かれて白し干し大根

東保

丸のままの干し大根に切り干し大根、その
どちらでもよい。海からの風に吹かれて乾い
てくる。丸のままのは漬け物にするのだろうか。
か。「吹かれて白し」という。その干し加減
を毎日見守って行くのである。

〈佳作〉

点滅の灯や雪の夜の滑走路

坂巻悠美

行く秋や殻剥きにくき茹で卵

山口信子

銀杏落ち葉あたたかさうな吹き溜まり

吉崎美和子

誌上句会〈編集部選〉

■子

きざはしの菩提子愛でて行きかいぬ
白壁の蔵に隠れて藪柑子
子規の庭訪う秋の鳥疎ら
すすき野に点線描く赤帽子
秋の暮玉子でとじるうごんかな
UFOを呼べ霜月の孔子廟
子供にも大人の事情文化の日
漁師らの古びし椅子や日向ぼこ
親も子も日溜りにいる猫の秋
極月の餃子を包む手の速さ

當問あさ子
佐藤雅子
森 懷人
早乙女喜栄子
笠井亜子
鳥羽 梓
工藤 掉
井村善也
山内桃児
湯沢 享

■規

初雁や隠居に規矩の有りという
冬囲い寺には寺の規定あり
晩秋の定規に赤き点あまた
所在なき雲形定規冬隣
抱く秋の杓子定規な義母の肩
秋声や圧すと痛いという基準
他人様の菊に定規をあてており
鮭などは北の規範にしたがえり
まだ残す内規としての柚子湯かな
山墓地に規格外なる寒さあり

當問あさ子
佐藤雅子
遠藤ゆかり
鳥羽 梓
内藤隼人
濱野具円
工藤 掉
千駄木敏郎
遠藤美佐子
安藤美佐子

■自由題

乱舞して命を繋ぐ秋あかね
主居ぬ星逢う夜のいと寂し
蟬螂や向き合ったまま夕日落つ
空深く足柄山の色紅葉
月影やアームストロング微笑みて
銀杏散る蹊の跡の喫茶店
往來の裏の往來暮の秋
肩紐のこんなところを鳥渡る
店頭の鯛焼見つめ人静か
銀将に雪降ることし投了図
寒灯やSuicaを挿して入金す
風呂までの谷に鳴る下駄冬銀河

當問あさ子
佐藤雅子
早乙女喜栄子
森 懷人
飯島英徳
鳥羽 梓
山内桃児
三島 治
袴田阿形
内藤隼人
佐々木美冬
富松亜紀子

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

平家自由題

締切・二〇一三年一月二十日
発表・『浄土』二〇一三年四月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

97 かい目 さっちゃんはネッ

かまち♡ひろう



かまちひろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)



編集後記

不安顔笑ふが如く初東雲

岱潤

先日釈徹宗さんという大阪の浄土真宗の方の講演を聴いた。活動家の僧侶で認知症高齢者のグループホームなど多彩な活動をされている方でしたが、最後にまた興味をそそるお話をしてくださった。それは最近の日本人がとにかく待つ時間をいやがる傾向が強いということ、電車が一分遅れただけでイライラし、パソコンの立ち上がりや、エレベーターの開閉など、数秒が我慢できない、他人に二、三分待たされたらもう怒ってしまう。これは大変危険な兆候だとおっしゃっている。むしろ理不尽に与えられたこの待つ

時間を、許し、価値あるものにできたら、すばらしいのではないか、その時間のことを「存在の時間」と名付けたいとおっしゃった。

その後読んだ五木寛之さんの「選ぶ力」に驚くべきことが書かれていた。それは、この国では十四年続いて三万数千人の自殺者が出ているが、自殺者はたばこを吸う人は少ないということだそう。これはちゃんと調べてみる必要があるとおっしゃっているが、前の話と合わせると、納得のゆくことだ。

先日旅行でバスの出発時間にみんなが合わせて集合したもの、お一人それぞれがおトイレに行く方がいらした。私など

は次に行く時間が迫りイライラしてしまつたが、たばこを吸われる方はラッキーとばかりバスから降りて一服されていた。今年は理不尽に与えられた待つ時間を楽しみたいものだ。

(長)

編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十九巻 一月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成二十四年十二月二十日

発行

平成二十五年一月一日

発行人

佐藤良純

編集人

大室了皓

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇〇一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話

〇三(三)五七八六九四七

FAX

〇三(三)五七八七〇三六

振替

〇一八〇八・八二二七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山・清浄華院)
拙博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

泰雲の

文と写真

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年

美味探訪



篠根果樹園

北海道

あけまして、おめでとうございます。

新年を寿ぐすばらしい言葉があります。「相逢共賀萬年慶」
相逢うて共に萬年の慶びを賀す。京都大徳寺開山、大燈国師宗
峰妙超禪師の語録より引用させていただきました。

さて、新年にふさわしいリンゴの紹介です。その名は『旭』。

11月に大阪の名店『カハラ』のご主人・森義文氏から頂いた
美しいリンゴは、現在「旭りんご愛好会」ができるほどの人気
で入手困難。驚くべきことに、あの有名なアップル社のロゴに
もなっているのです。

『旭』は1811年にカナダで発見された古い品種で、発見者が
MCINTOSH氏なのでマッキントッシュと命名されたそうです。

日本に入ってきたのは明治時代、さわやかな酸味、ジューシー
で真っ白の果肉、薄い皮、古い品種独特の良い香り。北海道
では40年前までは身近なリンゴだったそうです。が、昨今甘い
リンゴが好まれ、栽培する農家が減り、入手困難な希少なリン
ゴとなったのです。

寒冷地に適した品種。北海道、なかでもオホーツクの『旭』
が最高とされています。北見市の篠根果樹園ではこの歴史をた
やさないように大切に守り続けています。毎年10月の初旬から
販売して11月の中旬までが食べ頃になります。

篠根果樹園

090-0002 北海道北見市昭和213

0157-25-5502

法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方

其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方 こうるじっぽう 其の二

640円(税別)

響流十方 こうるじっぽう
600円(税別)



在庫
僅少

月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円(税別)



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より